

ネットワークアンケート ③⑧

糖尿病ネットワークを通して
医療スタッフに聞きました

Q. 貴院に通う糖尿病患者さんで、薬の飲み方を間違えて副作用を起こした方はおられますか？

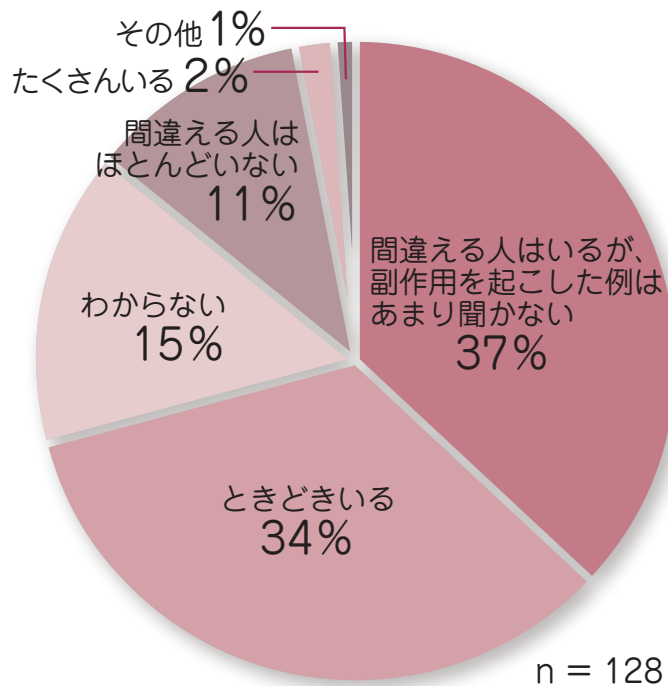
近年、多くの種類の経口薬が登場しており、作用機序や用法用量の異なる複数の薬を処方されている患者さんが増えています。患者さん個々に合った治療が可能になる一方、複雑で覚え切れないという一面もあるようです。今回は、経口薬の知識と服薬指導の実際についてうかがいました。

[回答数：医療スタッフ128名（医師15、看護師38、管理栄養士28、薬剤師35、臨床検査技師6、その他6など。うち日本糖尿病療養指導士36、糖尿病看護認定看護師10）、患者さんやその家族300名（病態/1型糖尿病59、2型糖尿病230、糖尿病境界型7、その他4、治療内容/食事療法232、運動療法207、経口薬242、注射薬24、インスリン療法132/重複回答あり）]

「間違える人はいるが、副作用を起こした例はあまり聞かない」と「ときどきいる」が同程度の割合でした。副作用の報告例はあまり聞かないとはいえ、患者さんが薬を飲み間違えることがあると7割以上の方が実感しているようです。

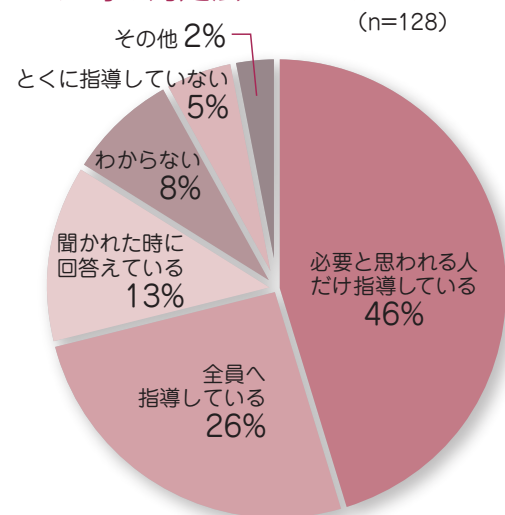
服薬指導の内容を聞いてみたところ、効能効果や作用機序、用法用量などの基本情報については比較的指導が行われているようですが、生活状況に応じた対応策については、あまり行われていない現状が見受けられます。とくに、経口薬治療を行っている患者さんが知っておくべき情報の

1つ、食事を摂らなかった際や、薬を飲み忘れた時の対処について、「全員に指導している」と回答したのは4人に1人。半数は「必要と思われる人にだけ指導している」とのこと。災害時はもちろん、日常生活の些細なアクシデントに患者さん個々が上手に対応できるよう、服薬指導を改めて見直す必要があるのかもしれない。また、4割の方が患者さんの投薬情報を関係者間で共有していないとのことで、処方内容による食事・運動療法の調整は、医療機関によって異なるようです。



自由記述では、「種類が増え、内服でも血糖コントロールがしやすくなった」という声が多い一方、「同じ種類の薬の使い分けや選択に困る時がある」、「自分の飲んでいく薬が分からなくなっている患者が増えた。飲み忘れた薬が何なのか、どの薬が余っているのか、話を聞いてもわからない」等、現場の苦労が増えたという声も多くみられました。

Q. 食事を抜く時や薬を飲み忘れた時の対処法について



Q. 服薬指導の実施状況について（指導している/されている）

医療スタッフ (n=128)		患者さん (n=300)
82%	薬の効能、効果	69%
75%	薬の種類	57%
67%	用法用量	60%
61%	薬の作用機序	38%
66%	副作用	35%
67%	食事をとらないときの対処	13%
63%	飲み忘れたときの対処	13%
62%	薬が飲めないときの対処	10%
36%	薬の保管方法	9%
29%	災害など緊急時の対処	4%
27%	お酒を飲むときの対処	5%
16%	薬の値段	13%
2%	薬局からの説明書のみ	13%
7%	その他	4%